

序

「礼法」とは、礼意を表現するための、起居・動作などに関する式法のことである。礼意をどのように表現するかは、その帰属する集団によって異なり、公家には公家のやり方があり、武家には武家のやり方があった。

武家の礼法には、小笠原流、伊勢流、今川流などの流派があるが、こうした流派のうち、武家にとどまらず、庶民にまでひろく行われたのが小笠原流とされる。それを証するごとく、「小笠原流」を外題等に冠する伝書や刊本等が多く現存し、東北大学附属図書館などの大学図書館や東京都立中央図書館などの公共図書館など所蔵している図書館は少なくない。

また当時の庶民が使用した手紙の書き方を記した「往来物」の刊本には「小笠原流礼法」が上欄に掲載されていることが多い。

また、小笠原流と一言でいっても、それを伝えた人などに着目すると、江戸時代の小笠原流はさらに次の四つの流派に分類される。

- 1 総領家～小笠原長清の嫡流である。長清の長男である長経には2人の子供があり、長男の長忠の子孫は信州松本の城主となる。長忠は糾法（旧馬術礼法）を伝承し、小笠原一族の総領家となった。「小笠原系図」によると、長経／長忠／長政／貞宗と続き、深志小笠原とも呼ばれた。貞宗は、後醍醐天皇の命により、清経家七代の常興とともに、武家の定まった方式として『修身論』と『体用論』を編纂し、『神伝糾法修身論』としてまとめた。その内容は、起居静動の式、言語礼、騎乗礼など64項目にまとめられたものであり、小笠原弓馬術礼法の基本となっている。さらに貞宗以後は、政長／長基／長秀と嫡男が跡を継ぎ、それぞれ足利将軍家の師範であった。貞宗のひ孫である長秀は、将軍義満の命により今川氏頼、伊勢満忠らとともに、供奉、食事、宮仕えや応対の仕方から書状の様式、蹴鞠の方法など武士の一般教養を目指した『三議一統』を編纂した。

長秀の後は、政康／清宗／長朝／貞朝／長棟／長時と続く。総領家の礼法の大成者は長時とされる。それまでの総領家の人々の著述の大半は、弓馬故実の書に限られていたが、長時は諸礼法を加え、弓、馬、礼を大成した。

しかし、これら小笠原流の礼法書の成立には長時およびその三男で家督を継いだ貞慶の果たした役割も大きいとされている。そして、室町時代の総領家は貞慶までである。また、貞慶の長男である秀政の次男忠政は初め播磨明石城主、後に小倉城主に封ぜられ、以後代々小倉藩主として明治維新まで続き、小倉藩主であった小笠原家が礼法を伝えた。

その礼法については一子相伝とされ、伝授の実態は不明である。この流派の伝書は、当主であった小笠原忠統が、昭和になって豊津高校に寄贈し、現存する。小笠原忠統は、その中心となる『小笠原七冊書』を翻刻し出版する。小笠

原忠統は秘伝書と考えていたようだが、同じ内容のものが、すでに江戸時代の初めに『大諸礼集』として刊行されている。この他、豊津高校に所蔵されるものは、弓馬礼法関連のものである。小笠原忠統は、『小笠原流礼法入門』など、小笠原流関する図書を少なからず著している。それらによると小笠原忠統自身は一子相伝を受けていないようである。自ら育った環境で見聞きしたり、体得したりしたこと、それに伝書の内容をふまえて、小笠原流を伝えたと考えられる。小笠原忠統の後には小笠原敬承齋が継ぎ、三十三世宗家を称している。

2 平兵衛家～小笠原家の第二代長経の二男清経に始まるとされている。もとは赤沢家と称しており、「赤沢大系図」によると、清経の後は安経／経顕／長興／常興／と続くが、長興は総領家から赤沢家に養子にされたという事からも両家の関係は親密であったようである。常興以後は、経光／武経／満経／教経／経隆／朝経／政盛／経智と続き、経智の三男である経直が家督を継いだ。

室町時代末期に、長時・貞慶が総領家の礼法を集成している際、赤沢家の経直が家伝の道だけでなく、総領家および京都家からも伝授されることにより、小笠原三家の伝統をすべて受け継ぐことになる。このことは、経直が將軍家綱に献上した家伝の書巻が三家の伝書から構成されていると見られることから考えられている。経直は慶長9年（1604）に江戸に赴き、徳川秀忠に仕えた年に小笠原姓に復している。

経直以後は、経治／直経／貞政と続き、直経が、延宝六年、將軍家綱に家に伝わる伝書五十冊十巻を献上している。内容は弓馬礼法関連のものである。直経の後の貞政が、將軍綱吉の養女八重姫の興入れの際の式や、家治誕生のとは式を担当しており、以後、將軍家の諸礼式を担当するようになったようである。

そして、貞政以後代々「平兵衛」を名乗るようになり、平兵衛家と称せられるようになった。この流派の礼法も、一子相伝とされ、伝授の実態は不明である。この流派の伝書は、現在第三十一世家元を名乗る小笠原清忠氏が所蔵しているようである。その伝書については、第三十世家元の小笠原清信著『小笠原流』にその目録が載せられている。

3 縫殿助家～小笠原長高が始まりである。小笠原家には総領家の貞宗の弟貞長の流れがあり、その子供である長高は叔父である光宗に養育されて京都に住んでいた。長高は足利尊氏に仕え、弓馬師範であったといわれ、以後代々足利將軍家に仕えて弓馬師範を司ったといわれている。長高以後は、氏長／満長／持長／持清／政清／尚清／植盛／秀清と続く。

『大諸礼集2』（平凡社、1998）によると、京都家は永和2年（1376）に足利義満が行った犬追物に氏長が検見役を勤めたことから始まり、明徳4年（1393）の犬追物には氏長の長男が検見を勤めたことなどは二木謙一氏の指摘される所であり、早くから弓馬故実に通じていたことを推測させるとして

いる。さらに二木氏は、『満濟准后日記』により、小笠原家が将軍家の師範であることが史料として確認できるのは、満長の子である持長が足利義教の師範であったことが初めであるとしている。その子供である持清は足利義勝および義政の師範になり、この後京都小笠原家は歴代将軍の弓馬師範を勤めることとなった。文禄元年（1592）には小笠原康治が家康の御家人となり、その子孫も礼法を伝えた。享保元年（1716）、将軍吉宗に家に伝わる伝書九十部をみせている。吉宗の犬追物等の復興に伴う式を担当し、その後も同様な役を勤める。明治になり、家が絶えたため、伝授等のことは不明である。

4 諸礼家～京都小笠原家の弓馬礼や総領家の礼法書の主要部分を継承し、小笠原流の総合化を果たしたのが諸礼家であり、そのなかで特に注目される人物が水嶋ト也（注1）である。江戸時代の小笠原流礼法は“お止め流”として将軍家以外では行えない礼法であったとされる。そのため、小笠原の系統ではなく、また将軍家以外に礼法活動を行っていた諸礼家の礼法は他の三家からは認められないものであった。諸礼家の礼法家たちは、礼法の従来のご実を踏まえつつも、その需要層の拡大と変容に応じた新しい礼儀作法の分野を樹立させ、諸大名から民間にまで広範囲における礼法活動を行い、多くの門弟を増やし、小笠原流礼法の普及につとめた。この水嶋ト也とその門下が伝えた礼法は、「水嶋流」とも呼ばれており、これが最も普及したものとされる。水嶋ト也には現在20人の弟子の名が知られる。この流派の伝書は多く現存し、その目録も複数伝わるが、最大のもので654巻の書名をあげる。

現存する多くの礼法書は、この諸礼家の水嶋ト也とその門流の者がの残したものである。

江戸時代の小笠原流は以上のようにおおまかには四流があった。このうち小笠原氏が伝えたはじめの三流は将軍家が執り行う行事等の式であり、現在の宗家、家元が伝えたものは一子相伝とのことで伝授の実態は不明である。広く行われたものではないため、その伝書についてもほとんど知られていない。

一方、諸礼家の伝書は膨大な数が現存する。もともと特定の藩に仕えていた者が禄を離れてまで「諸礼」を指導する例もみられ、その収入によって生活が十分に成り立つことも可能な職業となっていたようである。口伝をとまなう師範からの直接学習の他に、相伝された伝書による間接学習も行われたため、多くの伝書が生産された。今日、公共図書館に所蔵される小笠原流の伝書の多くはこの流派のものと考えられる。

これらは伝書の内容をみると、「礼儀とはこのようなものである」といった「思想」として語られるものではなく、「このような場合、どのように行動すべきか」といった「実用的知識」として具体的、形式的に明示されたものである。江戸時代の生活文化資料として、それなりに貴重なものといえよう。

現在、小笠原流礼法についてなされた研究には以下のものがある。

中世の小笠原流礼法についての研究は、藤直幹氏著『武家時代の社会と精神』（昭和42年、創元社）、二木謙一氏著『中世武家儀礼の研究』（平成11年、吉川弘文館）、『中世武家の作法』（平成11年、吉川弘文館）、『武家儀礼格式の研究』（平成15年、吉川弘文館）がある。以上は、主に室町幕府の武家礼法について研究したものであり、江戸時代の礼法については関連してふれられるのにとどまる。二木氏の研究は、小笠原家が小笠原流礼法の由緒として述べる「三議一統」などについて、史料批判をし、史実と異なることを明らかにした点が評価される。

島田勇雄氏は、『小笠原流諸派と言語伝書との関係についての試論－「女中詞」の成立をめぐって－』（注2）や、『兵法諸流と武者言葉との関係についての試論－小笠原流諸流系小池貞成について（一）』（注3）を著され、言葉との関連について研究されている。

また島田勇雄氏の遺稿をもとに、樋口元巳氏が『「大諸礼集2」解説』（1993年、平凡社）を著されている。江戸時代の小笠原流礼法の概略が述べられているほか、先行研究についても述べられている。なお遺稿をもととしたためか、系図で名前が落ちているなど、原典で確認しなかったのではないと思われる箇所が見受けられる。

岩手県内の礼法の地域伝承の状況を調査研究されている大森輝氏は、『江刺氏 K 家に伝わる小笠原流礼法書とその伝承状況に関する研究（その一）』（注4）、『江刺氏 K 家に伝わる小笠原流礼法書とその伝承状況に関する研究（その二）』（注5）を著されている。これは、岩手県において小笠原流礼法が独自の展開をしたことを明らかにしたものである。

島田勇雄氏の研究を発展されたのが陶智子氏である。その著『近世小笠原流礼法家の研究』（平成15年、新興社）は、「小笠原流」の一派「水嶋流」を中心に、江戸時代の礼法を指導した者また指導を受けた者の系統、すなわち伝系について、また伝書について明らかにしたものである。また陶氏は小笠原流の女性向礼法書である『女礼十冊書弁解全注』（1998年、和泉書院）のはじめての注釈をなしている。この他、陶氏により、『年賀之次第』（注6）、『産屋の次第』（注7）、『女中様品々』（注8）などの翻刻がなされており、具体的な礼法の内容を知ることができる。

村尾美江氏は、民俗学の観点から、小笠原流礼法を捉え、『婚姻儀礼にみる「礼法」の影響－夫婦盃の変遷の分析から－』（注9）を著されている。

また、松浦史料博物館所蔵の小笠原流礼法書をもとに、藩主の礼法学習について綿拔豊昭氏が記した『松浦誠信と小笠原流礼法』（注10）がある。

江戸時代の諸礼家の小笠原流については、陶智子氏によって、伝書の奥書等から、誰から誰に相伝されたか、つまり伝系がほぼ明らかにされている。今後の課題として、まずは礼法を指導した人物に着目し、伝系に見られる人物の伝記とその人物が伝えた伝書の研究がなされるべきであると考えられる。またその成果をふまえて、礼法書の伝本研究がなされるべきであろう。

本研究はそうした立場で、水戸藩士であった稲葉則道が編んだ『小笠原流小記録』と背

山延彝に相伝された『水嶋流諸礼秘書』『水嶋流諸礼秘巻』について研究するものである。

前者は、諸礼を実際に指導した稲葉則道が、水嶋流の礼法書をふまえて、今必要なことを中心に編纂したもので、15巻と附録にまとめられたものである。「実際に行われる礼法」という、礼法の実学的な点に着目した場合の貴重な資料である。これまで陶智子氏が『近世小笠原流礼法家の研究』でふれた他にとりあげられたことはないようである。

後者は、学者として知られる青山延彝に相伝された水嶋流の伝書そのものであり、水嶋流の伝書群としてまとまったものである。他に伝本が知られるものが大半で、水嶋流の礼法指導者がどのような伝書を相伝していたかという、形式的な面が知られるという点で注目される資料である。青山家については若干の研究がなされているが、礼法書とのかかわりについて述べたものはないようである。

これら性格の異なる二つの伝書群をとりあげて、諸礼家の小笠原流礼法伝書の一様相について明らかにしたい。

【注】

1：水嶋ト也は、小笠原貞慶から礼法を伝授された家臣小池貞成の弟子であった斎藤久也の弟子である。水嶋ト也の父は川崎主水といい北条氏に仕えていたが、後に豊臣家に仕えたとされる。水嶋ト也は慶長16年（1611年）に生まれ、大阪の陣には7歳で父とともに城内にいた。落城後は大和高取に逃れて当地で成人する。その後植村家に仕えたが辞して小倉にて小笠原流礼法を学び、江戸に赴き、これを普及したとされる。水嶋ト也の礼法家としての活動の業績は多大であるが、特に注目されることは武士階級に關係する女性、つまり武士の奥方に仕える女中等のための礼儀作法である「女礼」を確立したことであろう。

2：『小笠原流諸派と言語伝書との關係についての試論－「女中詞」の成立をめぐって－』
『甲南国文第23号』、昭和51年3月

3：「兵法諸流と武者言葉との關係についての試論－小笠原流諸流系小池貞成について（一）」『水門－言葉と歴史－第10号』、1977年4月

4：『翻刻「年賀之次第」』『秋桜－第13号』、1996年、3月

5：『翻刻「産屋の次第」』『秋桜－第14号』、1997年、3月

6：『翻刻「女中躰品々」』『秋桜－第15号』、1998年、3月

7：「江刺氏K家に伝わる小笠原流礼法書とその伝承状況に関する研究（その一）」『盛岡短期大学研究報告－第39号』、昭和63年12月

8：「江刺氏K家に伝わる小笠原流礼法書とその伝承状況に関する研究（その二）」『盛岡短

- 期大学研究報告一第40号』、平成元年9月
- 9 : 『婚姻儀礼にみる「礼法」の影響一夫婦盃の変遷の分析から一』『日本民俗学一第23
5号』、2003年8月
- 10 : 「松浦誠僧と小笠原流礼法」『平戸市史研究一第8号』、2003年